



おばあちゃんとソンプレロ

すずき ようこ
鈴木 庸子

ナポリオリエンターレ大学・講師

ナポリ近郊のカメオ彫刻家の工房に、インタビューに伺った。60代の著名な彫刻家と、頭角を現しつつあるその息子、甥っ子の3人の作業場は、彫刻家の母上が1人暮らしをするマンションの一角を改装した、ごく簡素なものだった。

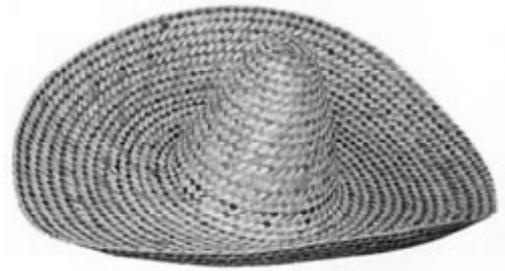
さて、この母上。孫と同年の外人の女の子が、自宅の10㎡にも満たないごちゃごちゃした空間に、自慢の息子や孫の話をお話をわざわざ聞きに来るといふ状況がいたくお気に召し、私の到着前から、その日の話し相手として私に狙いを定めていたらしい。ご挨拶申し上げるや否や「お昼ご飯まだでしょう？」と、彼女の牙城である台所に私を引きずり込みにかかった。インタビュアーが私ではなく彼女になりそうな流れを読んだ男3人が、やれマッサージの時間だの飼犬が鳴いているのだのと、尤もらしい理由を並べて彼女を自室に押し込んだため、その後私はスムーズに訪問の目的を遂げることができたが、彼女の好奇心に満ちた腫と巧みな会話術に強い印象を受けた。聞けば、毎日ご自分で料理をし、男3人の世話をやき、足さえ痛まなければ4階までの階段をものともせず買い物にも出向かれるという。実にかくしゃくとした彼女が90代だとは、言われてもにわかには信じがたかった。

男性たちのインタビューを終え、お暇しようといすから立ち上がると、工房の入り口の上に飾られた、麦わらのソンプレロが目に入った。色あせたりボンも佻しい、いかにもお土産物然とした、

陳腐さの塊のようなそれと、画集の切り抜きが散らばる仕事場や、彼らのカメオの芸術性・宝飾品としての完成度の高さとのあまりのギャップに、思わず「何で、ソンプレロ・・・」とふきだしてしまった。そのとたん、散々話をし尽くしたはずの3人の口が再びほどけた。「良くぞ聞いてくれた！これはおばあちゃんの勲章で、一族の大切なエンブレムなんだ。コーヒーいれるから、もうちょっとだけ座っていきなさい」。

20年以上前のある日。70を過ぎたおばあちゃんが突然、「私には弟がおる」と言い放った。生まれてこのかた聞いたこともない、未知の親族の存在を告げられた家族が騒然となる中、落ち着き払った彼女は手短かに説明を加えた。「貧しい南イタリアから抜け出そうと、大勢の同胞と10代の若さで南アメリカに旅立ってね。メキシコで職を見つけると、婚約者を迎えに戻ってきたんだよ。ところが彼が留守の間、両親に『頼る者もない異国で、好き好んで苦労しなくても』と説得され続けた彼女は、結局未知の土地への一步を踏み切れなくて。弟は心を残しつつも、1人でメキシコへ戻ったのさ。その後何度か手紙のやり取りをしたけれど、世界大戦の混乱で便りが途絶えて、それっきり・・・」。言葉もない家族を尻目に、彼女はこう続けた。「じゃあ、弟に会いに行くから」。

皆はこぞって反対した。「数十年音沙汰のない、生死もわからない1人の外国人を、勝手にわから



ない新大陸で、どうやって見つけ出そうっていうの」「10km離れたナポリがもう外国のおばあちゃんが1人で海外旅行なんて、カモにしてくださいって言うのも同然じゃない!」「言葉はどうするの?ナポリ語しか話せないのに」「お願い、歳も考えて」。しかし、長年その存在を胸に秘めてきた弟を、もう一度抱きしめようという姉の決意は固かった。結局親族会議を重ねた結果、一族は知人にアメリカでのトランジットまでを見届けてもらうという条件で、彼女を送り出した。

1ヵ月後。無事帰国した彼女は、開口一番「元気だったよ」。現地の大使館を皮切りに、在墨イタリア人ネットワークをたどると、弟と難なく再会できたという。何でも彼は、こつこつ働いた末に船会社を起こして成功しており、また現地の女性と結婚して3人の息子(全員大学を卒業)にも恵まれ、かの地で公私共に充実した生活を送っていて、「もうすぐ挨拶に来るから、しっかり面倒見てやるんだよ」。

あまりの展開に周囲があっけにと取られる暇もなく、今度は船に乗って「メキシコのおじさん」その人がナポリ港に現れた。長年胸の奥に押し殺して来た望郷の念は、癒しても癒しきれないものがあったであろう。彼は親族という親族と抱擁を交わし、五感を全開にして、むさぼるように数十年ぶりの故郷での時間を享受した。その一方で、かつて将来を約束しながらそれを果たせなかった、あの婚約者の情報を集め、メキシコへ戻る直前に

彼女を探し当てた。驚いたことに彼女は、彼がメキシコへ旅立った後単身ミラノに向かい、教師として身を立て、独身を貫いていた。ミラノへ馳せ参じた彼は、万感の思いで「申し訳ない」と謝った。「いいえ、私が悪かったの」と答える彼女の頬には、一筋の涙が光った。

姉の愛と勇気がプレゼントしてくれた夢のような帰郷の日々は、瞬く間に過ぎた。父と感動を分かとうと、ナポリに自らのオリジンの半分を負う息子の1人が飛行機でこの街に向かっていたが、彼が予約していた船の出港のほうが先となった。近い将来の親子揃ってのイタリア長期滞在を誓いつつ、「メキシコのおじさん」は親族や友人に見送られて、妻と息子たちの元へ帰っていった。

その直後にナポリ入りした「メキシコの従兄弟」は、父とのすれ違いを悔しがる暇もなく、父と同様一族を挙げての大歓迎の渦に巻き込まれた。初めてながら懐かしいナポリ行脚が一息ついたある日、新聞を開いた彼の眼に、船の事故のニュースが飛び込んできた。

生存が絶望視されたその乗客員には、数日前までこの地を堪能していた、父その人も含まれていた。

お暇のご挨拶にと部屋を覗くと、弟と再会した劇的な旅の記念にこのソンプレロを持ち帰った、ハートと頭脳と度胸を備えたおばあちゃんは、まるで赤ん坊のように、すやすやとお昼寝中だった。